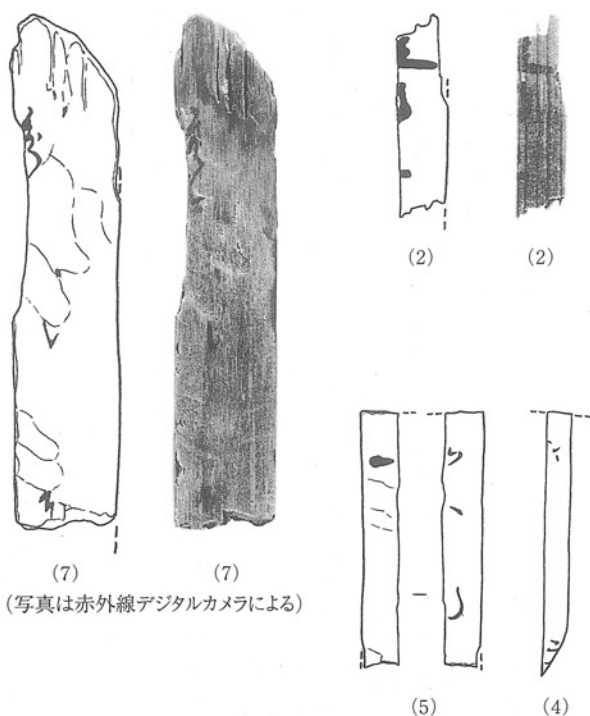




られる。(7)は表に二行分の墨書が見られるが、ハギトリ状の削りにより充分に文字が判読できない。右側面以外は欠損する。

木簡の釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏・馬場基氏、島根県古代文化センターの平石充氏からご教示を得た。

(角田徳幸)



岡山・川入・中撫川遺跡

- 1 所在地 岡山市中撫川字舟橋
- 2 調査期間 一九九九年（平11）六月～二〇〇一年三月
- 3 発掘機関 岡山市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 高橋伸二・河田健司・安川 満
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

川入・中撫川遺跡は足守川流域の沖積平野左岸に立地する。かつて足守川が「吉備穴海」にそそいだ河口付近にあたるとみられる。

これまでの調査で築地状遺構が検出され、平城宮式瓦が出土しているほか、今回の調査でも飛鳥・奈良時代の建物群や奥山久米寺式の軒丸瓦が出土するなど、立地を含め、古代の港湾的施設の可能性も指摘されている。

今回の調査は市道中撫川平野線建設に伴うもので約五七〇〇m<sup>2</sup>を対象としている。検出遺構は弥生時代前期～中世の長期間にわたるが、特に弥生時代末～古墳時代初頭、飛鳥～平安時代（七世紀～一世紀）のものが多い。

木簡は調査区南端部近くの井戸SE一四二五から出土した。この井戸は掘形の径約3mを測る規模の大きなもので、深さは現状で約二・五m、海拔マイナスイ・二五mに達している。径六〇cmほどの広葉樹を削り抜いた井筒を埋設した後、上部を板材を組み合わせた方形の井戸枠を構築している。木簡は井筒外側に井筒に接して埋められており、井戸構築時に埋められたものとみられる。遺物は木簡以外には、ごく少ないが方形井戸枠内の円礫敷きから須恵器片が出土しているほか、埋土最上層からは石製模造品かとも思われる石製品二点、垂飾状の石製品一点が出土している。須恵器片などから奈良時代のものと考えている。

なお、井戸は南が大きく落ち込む微高地末端部に立地しており、削平のためか上屋などの存在は不明である。調査範囲が限られているものの周辺にはこの井戸以外の遺構はきわめて少なく、微高地末端部という特異な立地、廃絶時のものではあるが石製品の存在など何らかの祭祀に関わる井戸の可能性もある。

## 8 木簡の釈文・内容

(1)

田 田  
[田カ] [都カ]

友 友  
[之カ] [友] (絵)

(524) × (40) × 20 081

「友」「田」「都」などの字を繰り返し書いており、習書木簡である。表裏も不明。上端は焼損、左右両端は欠損しており原形などは不明である。また、欠損により全体像・内容などがわからないが、裏面下端付近には絵画か落書のようにもみえる墨書がある。

## 9 関係文献

岡山市教育委員会『岡山市埋蔵文化財センター年報1』(二〇〇二年)

(安川 満)

